聖学院大学総合研究所ラインホールド・ニーバー研究会及び組織神学研究会共催
2019年度第1回ラインホールド・ニーバー研究会及び組織神学研究会
五十嵐成見「ラインホールド・ニーバーの人間論再考」

発表者：五十嵐成見助教

2019年9月29日（月）18：00～19：30まで、聖学院本部新館（駒込）2階集会室を会場に、「2019年度第1回ラインホールド・ニーバー研究会及び組織神学研究会」が開催された（今回は昨年と同様、ラインホールド・ニーバー研究会と組織神学研究会と合同開催）。今回の発題は、五十嵐成見氏（聖学院大学心理福祉学部兼人間福祉学部チャプレン・助教）による『ラインホールド・ニーバーの人間論再考』であった。初めに開会祈祷が、菊地順氏（聖学院大学政治経済学部チャプレン・教授）によってささげられた。出席者は12名であった。

この発題の背景には、本年4月に聖学院大学出版会より刊行された、ラインホールド・ニーバー（以下、ニーバーと略す）の著作である『人間の本性』が髙橋義文氏・柳田洋夫氏によって訳されたことにある。この著作は、1939年にニーバーがギフォード講演にて行った講演の前半部分にあたり、これまでいくつかの翻訳が出されてきたが、今回の翻訳は、ニーバー研究における第一人者らが取り組んだ労作であり、その訳業の正確さや訳語の適切さ等を含めて、大きな意義があることは論を俟たない。

ただ、ニーバーの人間論を巡っては、研究史的な観点からある課題を負ってきている。それは、ニーバーの人間論は、過度に罪論に強調を置き、人間の歴史形成の可能性を軽視し、結果的に悲観主義・敗北主義に陥っている、という類の批判に対する取り組みである。

五十嵐氏はこの批判を念頭に置き、特にニーバーの神学思想的観点から、まず人間の自己超越の能力と罪の不可避的関係性を、人間論の概要を紐解きつつ明らかにした後、人間の歴史形成面の諸要素を、「神の似像性」、「原初的義」、「生の責任性」、の三つの観点から指摘した。ただ、それらの諸要素においては、なお罪との関わりがそれぞれ不可分にニーバーにおいて想定されている。よって、その人間論は、罪論を主体として捉えるのではなく、あるいは逆に、自己超越（自由）の能力を強調するのでもなく、その二つの逆説的緊張関係を把捉した理解が重要であり、またその両義的理解こそがニーバーの人間論の最大の特色かつ魅力である、と五十嵐氏は主張した。またニーバーは、全的堕落説を採用しないが、決して自律的な人間論を想定しているわけではないため、その人間論は必然的に「恩寵論」を要請している、とも主張した。

発題の後、活発な質疑応答が行われたことも付記しておく。

（報告者：五十嵐成見［いからし・なるみ］聖学院大学心理福祉学部兼人間福祉学部チャプレン、助教）

会場の様子